



人権のページ

まっぼっくり



みんないっしょに
生きる社会を

6月号に続き、全国中学生人権作文コンテストの法務大臣賞受賞作の後半を紹介します。

3 いじめSTOP 私ができるべきこと
ハンセン病になった人は差別や偏見に苦しみ傷ついてきた。では、そんな人は、現在いないのか。いや、今の時代にもあることだ。「いじめ。」これも許されない差別。私はいじめによって、自ら命を絶った人がいるというニュースを聞くにつけ、私にも無関係なことではないと思う。人を無視する、悪口を言う。これらがいつかいじめになり、人の命を奪ってしまうことにつながると思う。

私は周りに流される性格だ。やってはいけないと分かっているが、なかなか自分でストップをかけられない。しかし、このままだと私が人を傷つけてしまう。だから、自分にも友達にもNO!と言える真の勇氣を持たなければならぬと思う。ちょっとした悪口、間違った知識や行動が差別を生むのだから。私は、そう考えてハンセン病問題を考

えてみた。差別を広げたのは、「らい予防法」をつくった国が、「ハンセン病は恐ろしい病気。」と間違った宣伝をしたからだ。例えば、患者が歩いた後は、消毒で真っ白にする。それを見た人は「恐ろしい病気」と思ってしまう。周りの人は鼻をつまんで歩く。好きで病気になったわけではない。それなのに、犯罪者のように扱われた。こうして差別はつくられた。しかし、私は、差別した責任は国だけ

ハンセン病 問題から学ぶ

「NO!」と言える強い心をもつ

〜ハンセン病問題から学んだこと〜

後藤 泉稀

ではないと思う。市民が、国の間違った情報を信じ、自らに差別を宿したからだ。当時の人たちは、それに気がつくことなく差別を続けたから、あのような悲しい出来事が起きてしまったのだ。間違った情報はとても怖く、恐ろしい。また、社会の差別をなくすことはとても難しく、私一人では出来ないことだと思う。しかし、まず「自分から行動する」ということが大事だ。だから私はまず、いじめの

入り口である人の悪口をなくすことから始める。

4 人と人をつなぐものゝ私の決意

私は小学校の時、先生に「人間が生きてのために絶対に必要なもの」を教えられた。夢?希望?色々考えた。しかし先生は、「もつと大事なものだよ」と繰り返した。やっと先生の口から出てきた言葉。それはたった一字。「愛」だった。先生がこんな話をしてくれた。「人はね、他者から愛をもらわないと生きていけないのだよ。」そうか…。私が今を生ぎられるのは、多くの人から愛をたくさんもらい、支えられているからなのだ。

目には見えないけど、確かに愛をもらったという時は何かを感じる。ほっとしたあたたかい何かを。

そうか。金さんの部屋で、そこにいたみんなが笑顔になったのは、金さんの私たちへの愛があつたからなのだろう。金さんが言っていた。「こうやって、みんなが会いに来てくれるから幸せだよ。」これが、金さんの愛だったに違いない。

私も、金さんのように、たくさんの人と愛でつながる人間になりたいと思った。そのために、周りに流されず、自らの意思でNO!と言えるようになる決意した。

作品は以上ですが、最後に、誰もがすべての差別に、自らNOと言えるような社会であって欲しいと願います。

人権推進課